

編集部便り



総合的学習の時間の一環として、編集部には職場訪問の生徒たちが来社することがあります。まず、会社へアポイントをとることから始まり、会社への訪問依頼書が届き、日時が近くなると確認のための連絡があります。そして、会社訪問当日となり、後日学校に戻った生徒たちから、お礼の手紙や、体験レポートなどが寄せられます。それらの一つ一つに表れた「書くこと」の内容は、編集部にとって、国語の教科書がどう生きて働いているかを確認する場にもなっていて、訪問の一回一回が楽しみでもあり怖くもあります。

学習指導要領にも「書くこと」の指導時数については、国語科の授業時数に対する割合は、「各学年とも十分の二～十分の三程度とすること」と示されているように、「書くこと」の学習は国語科全体の指導時数のなかで、大きな割合を占めています。日常生活の中で発揮しやすい「書くこと」の教科書でのありようを今後も探っていきたいと思います。

広報課便り



葡萄食ふ一語一語の如くにて

中村草田男の句です。以前この句に触れたとき、この葡萄は苦かったに違いないと思っていました。俳句を生み出す作業は大変なものがあるだろうから、おそらく葡萄を食べながらもいい言葉はないかと探していたのだろうなと。しかし、この号を編んでみて、この葡萄は苦かったわけではない、ひょっと甘かったに違いない、芳醇な味わいだったんだらうと思うようになりました。

「二十年を過ぎてたいいていのはそれなりに表現できる」とお書きくださった阿刀田先生。送ってくださった原稿用紙には幾度となく言葉を考え、選んだ跡が顕著でした。言葉を確認する電話での「いや、ここはこっちの言葉の方がわかりやすいかと思つて」という声は優しく、一語一語を慈しんでおられるかのようにでした。中学生も書くことは決して嫌いではない、アイテムを工夫したり、身近な教材を用意したりすれば、率直で純粹な言葉が出てくるように感じました。草田男の句のように一つ一つの言葉に芳醇な味をもたせる大きな役割を国語科は担っていると思えました。

次号予告

●特集テーマ

「国語の力を考える」

— 情報を活用する力 —

・これからの時代に何が必要か考えます。